役員エッセイ

大通公園を望む窓辺から

本人限定受取郵便物に意見する

監事　梶（かじ）　良行（よしゆき）

本人限定受取郵便物（特伝型）到着のお知らせ在中　転送不要と、封筒の左側に朱色のハンコが押された郵便物が配達された。封を開いて読んでみると、何やら重要な郵便物なので記載された名宛て人でなければ渡すことはできない。受け取るには二つの方法があり、本人への配達あるいは郵便局窓口での受け取りのどちらかを選んで連絡するようにと、丁寧なことばで書かれていた。連絡方法はPC・携帯・スマホあるいは電話、FAXと何やら面倒くさい。Tel. 0570の電話に至っては音声ガイダンスに従って云々とAIの声が聞こえてくるだろうし、電話の発信者に通話料が発生するのも違和感がある。それなら直接、受け取りに行けばよいだろうと、本人確認書類の運転免許証と郵便物の到着通知書を持参して郵便局に向かった。途中、これで配達員や郵便局員の皆さま方に余計な仕事を押しつけることなく、『わざわざご足労いただき、ありがとうございます。』と感謝されるものと思っていた。しかし、信じられないことに郵便物は手渡されなかった。

日本郵便のホームページを見ると本人限定受取郵便（特伝型）は、利用の申込は日本郵便株式会社が別に定める郵便局のみでの取り扱いとなり、窓口での受け取りも然りと書かれていた。別に定める郵便局とはどこなのか。送られてきた到着通知書をよく読んでみると「ゆうゆう窓口設置局」があると分かった。窓口で受け取るためには、あらかじめ保管郵便局に連絡した上で、そこに行かねばならない。「ゆうゆう窓口」は良いが保管郵便局は信用ならないのでダメということなのか。

本人限定受け取り郵便物は、確実に本人の手に届ける目的のために使われる。その“本人”が受け取りに来ているのに受け取れないのでは本末転倒、支離滅裂ではないか。この制度は改めるべきと声を上げる。

100-100

前理事　奥村（おくむら）　利勝（としかつ）

私は2024年３月に内科学講座を定年退任し、現在理事・副学長として旭川医大に勤務している66歳のジジイである。もちろん理事・副学長業務が主であるが、大学に在籍している最大利点を活かし、現在も定期的に基礎実験を行っている。これができるから大学に在籍しているとも言える。大学院生時代からのライフワークとして「脳腸相関」に関する基礎研究を継続し、現在までその領域の英語原著論文が95編となった。基礎研究による原著論文は自分たちのoriginalなデータが必要で、実験を行い解析して論文を書くので、大学・研究機関以外ではこのプロセスを取ることはほぼ不可能であるが、大学在籍中ならジジイでもやる気になれば実験して論文を書ける。

人間は何かと数字で表現する。昨年の流行語、大谷選手の50-50できりがいい数字が好まれる。私も95まできたら「100」が今自分の目標になっている。現在の研究チームにはこの15年来の戦友である野津司先生（地域医療教育学講座兼教育センター教授）がいて、二人で年間５編のペースで脳腸相関の基礎研究に関する英語原著論文を積み重ねてきた。私ももう少し大学に在籍する任期があるので、「あと５本」なんとか100を達成できればと考えている。

もう一つ100を達成したかったのが、内科学講座担当期間８年間の入局者100人であった。これは旭川医大の一丁目である地域医療貢献に欠かせない数字で、講座担当者としては最も重きを置いて取り組んできた。こちらは残念ながら入局者総勢92名と担当期間が終了し惜しくも未達成で試合終了した。現時点で95-92と 研究者個人として達成したいこと―旭川医大内科学講座担当者として達成したかったこと100-100の満貫成就はならなかったが、なんとか一つの100を達成するチャンスがまだあるなら目指したい。問題はジジイの気力体力が続くか？